



14・15世紀フランスにおける服装の歴史的考察

中江, 美幸

(Citation)

国民経済雑誌, 137(3):58-83

(Issue Date)

1978-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00172191>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00172191>



14・15世紀フランスにおける 服装の歴史的考察

中 江 美 幸

I は じ め に

広く歴史研究において対象とされるべきものは、総括的に言うならば、ある時代のある社会における具体的な現実の生活現象全体ととらえられよう。もちろん、この具体的な現実の生活現象全体を一つの像として把握することは不可能ないしは至難の技と言える。言うまでもなく現実の人間生活はきわめて多様な側面から成りたっているからである。それゆえに歴史研究において従来様々な視角とアプローチが模索され、相当の成果もあげられてきたのである。そのばあい、従来の歴史研究においては、往々にして一国家ないしは一国民の枠内での社会構成史的研究に重点が置かれ、そのなかにおける実際の生活のあり方を考察することはむしろ等閑に付されてきたように思われる。しかしながら、歴史研究の目ざすところを、ある時代のある社会における具体的な人間像を得、その人間像を通じて諸活動のあり方をとらえ、そのことによってその社会をより現実に即して把握することとするならば、この二つの方向は相互に密接な関連をもって——少なくとも基本的姿勢としては——とらえられねばならないと考えられる。そして、今後の研究に対する課題と要請の大きさをかんがみて、こうした姿勢が最も必要となるのは、具体的な生活という次元にかかわる歴史研究の側面ではないかと思われる。しかし、その考察対象が人々の日常生活の営みの総体であることからすれば、そこに包摂される諸現象は非常に多面的かつ深遠なものと言えよう。それゆえにまた、多様な視角からのアプローチを試みなければならないのである。こうした基礎的状况を踏えたうえで、本稿で

はそれを日常的な物質文化に重点を置いた歴史的考察としてとらえ、特に衣服という側面から検討したいと思う。

言うまでもなく衣服は人間の物質生活における基本的な一領域を成すものであり、同時に、それを身につける主体である人間と時代の個性を意識的・無意識的に具現している。換言すれば、ある時代のある社会における衣服には、地理的・気象的条件、技術水準を含む経済的状况、社会のあり方や伝統に由来する社会的状况、政治権力の動静に起因する政治的状况、芸術・美意識を含めての文化的状况、宗教や道徳感や生活意識を含む精神生活全般に及ぶ精神状態などの諸要素が、程度の差こそあれ作用を及ぼしていると言える。そしてまた、衣服それ自体の側からも、同時にないしは結果的に、経済、社会、文化などへ影響を及ぼすものであったと考えられる¹。それゆえに服装は人々の生活との関連を遊離してはとらえられないのである。服装を歴史のなかでとらえるということとは、こうした包括的なものとしての服装の存在意義の歴史性を問うことであり、衣服が人々の現実の日常生活のなかでもっていた意義を把握することであるとさえよう。そしてさらには、究極的な目標としては、それを通じてある時代の社会のあり方をより鮮明に描出することでもあろう。そしてそれはまた、言うなればすでに存在するところの服装史プロパーとしての研究にも新たな方向と局面を呈示しうるものであろうと考えられる。すなわち、従来の服装史研究の多くが、各時代、各社会に見られた服装の様式の変遷に関する平面的・羅列的な叙述に主眼が置かれ、生活との関連で服装をとらえることは付随的・断片的にすぎなかったと思われるからである。そこでは、服装の主人たる人間の姿は希薄である。その意味で、従来の研究においては、服装は、むしろ風俗史的・美術史的・美学的対象としての取扱いの域を出ていなかった²のである。

1 拙稿「服装におけるファッションの変化と繊維工業」『国民経済雑誌』、第136巻第2号(1977年)、96ページ。以下、「ファッションの変化と繊維工業」と表記する。

2 拙稿「服装史研究への序説——F. PIPONNIER の業績によせて——」『国民経済雑誌』、第134巻第2号(1976年)、73ページ。以下、「序説」と表記する。

3 パスカル・セッセ著、日向あき子訳『服飾の歴史——その神秘と科学——』、美術出版社、1964年、13-21ページ。

さて、服装を前記のように位置づけるならば、服装を歴史のなかでとらえるというばあいにも様々な関連のもとでの考察が必要となるであろう。本稿では対象を14・15世紀フランスにおける服装に限定し、問題の所在をさぐるとともに若干の検討を試みたいと思う。そのばあい、主眼とするところは、この時期のフランスにおける服装のあり方の歴史的意義を問うこと、およびそうした服装を媒介として当時のフランス社会の性格をより具体的に認識することにある。本稿ではそれを以下の観点から進めたいと思う。

まず第一に、今なお身分制が社会の基本的な組織原理であった当時のフランス社会において、服装がどのような存在形態をとっていたかを、各社会階層の生活のなかで概括する。第二に、そうした服装のなかに反映されていた社会的要素を考察するとともに、ひるがえって服装を通じて当時の社会の実態の一端をとらえる。第三に、こうした服装を媒介として、意識的・無意識的にそのなかに現われ出していた当時の人々の心のありようを、生活意識の側面から追体験したいと思う。このなかには、当時の人々の社会意識、肉体観、女性観といったものも含まれてくるはずである。第四に、当時の服装のあり方を踏えうえて、こうした衣生活の成立を可能にした経済的側面について考察する。そのばあい、それを、衣服の調達という点から、すなわち、具体的には素材としての織物に関する消費のあり方と衣服製造の状況から検討する。そして最後に、前述の諸点のそれぞれに大きく作用していたと考えられる、この時期のファッションそのものの意義について多少論及したいと思う。

なお本論にはいるまえに、本稿で対象とする時期のフランスについて若干の概観を得ておくことにする。⁴当時期は、ヨーロッパ史のうえからは一般に封建社会の崩壊期、絶対王政の準備期とされる時期であり、フランスのばあい、この過程を大きく推進したのは、百余年の長期にわたる対イギリス戦争としての百年戦争（1337—1453）であった。周知のように、この戦争の発端はフランス王位相続権をめぐる両国間の争いであったが、フランス国内における政治地図

4 拙稿、「序説」、75-76ページ。

に大きな変化をもたらすものであった。対外戦争の体裁をとってはいたものの、同時に王族諸侯間の対立・抗争を内包したこの戦争がフランス国王の勝利に終わったとき、国内における王権の優位もまた確立され、それとともに国王による中央集権化の方向がともかくも確保されたのであった。けれども国内におけるこうした政治的再編成の動きは、諸侯勢力の相対的弱화를促したとはいえ、諸侯の存在を否定するものではなかった。事実、社会は今なお中世以来の身分制の枠内で組織・維持されていたのであり、その意味では諸侯は国王とともに貴族身分として依然として支配者階層を構成していたのである。しかしながら、こうした政治上の新しい動向は単に政治上のこととしてとどまったのではなく、従来フランス各地で華々しく展開された諸侯たちのそれなりに個性的な宮廷文化をも終息の方向へと至らせ、国王の宮廷文化に収斂する方向へと向かわせるのである。⁵本稿では、こうした時代の変遷を背後に置きつつ、この時期の服装を媒介として当時の社会のより具体的な姿を得るための一試論としたいと思う。

II 14・15世紀における服装の存在形態

1 服装の型の変遷と現実におけるあり方

この時期の服装を見るばあい、次の二点をあらかじめ念頭に置くことが必要であろう。まず第一に、当時の衣生活においては冬服がその基調を成し、特別な夏服というものはなく、気候に応じて身につける枚数を加減したということである。このことは当時の服装のあり方の基本を規定するものであり、型の変遷もこの基本的枠内で進んだのである。これは当時の気候が総じて不順で、寒さが厳しかったことに起因したのだが、さらにまた、暖をとるのに不適當な住宅事情、寒さに対する抵抗力をつけるには余りにも不十分な栄養状態が相乗的に働いたのであった。⁶そしてこれはフランスだけでなく、ヨーロッパ全体についてとらえられる状況であった。第二に、この時期の服装の型に関しては、その基本的性格そのものは当時のヨーロッパにおいてほぼ共通していたというこ

5 EVANS, J.: *Dress in Mediaeval France*, Oxford 1952, p. 59.

6 MANDROU, R.: *Introduction à la France moderne (1500-1640)*, Paris 1974, pp. 47-50.

とである。幾分の違いがあるにしても国ごとの差異はほとんどなく、そうした差がそれとして明確になるのが、本稿で扱っている時期の服装を通じて16世紀以後のそれでもあった⁷。このことは、この時期のヨーロッパ世界の動向と符合するものであった⁸。以下ではこうした点に留意してこの時期の服装の型の概観をたどることにする⁹。

当時の服装は、その型から見れば、文化史および美術史の時代区分に従って、ゴシック・スタイルからルネサンス・スタイルへの移行の過渡期にあるととらえられる。ゴシック・スタイルの服装の型の特徴は、ゆったりとした丈の長いもので、総じて画一的なものであった¹⁰。これは中世を通じて服装に見られた基本的な性格で、そこにはキリスト教における、肉欲・肉体の否定→体型の表出抑制という態度が反映していたと考えられる¹¹。けれどもゴシック・スタイルも後半になると型のうえで大きな変化が生じてきた。それは服装における男女の差が明確になってきたことで、これは男子服の丈の短縮化に最も顕著に現われた¹²。こうした傾向は、百年戦争の開始とともに騎士スタイルが優勢になったこと¹³と、および男女の性別を明確にするというキリスト教の態度に影響されたものであろうと考えられる。これまでの男女服ともに共通に長い丈のものであった¹⁴。

7 CONTAMINE, Ph.: *La vie quotidienne pendant la guerre de Cent Ans: France et Angleterre (XIV^e siècle)*, Paris 1976, p. 199.; BLACK, J. A.: *A History of Fashion*, London 1975, p. 139.; MINCHINTON, W.: *Patterns and Structure of Demand 1500-1750, The Fontana Economic History of Europe 2—The Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Glasgow 1974, p. 131.

8 BRAUDEL, F.: *Civilisation matérielle et capitalisme (XV^e-XVIII^e siècle)*, T. I, Paris 1967, pp. 238-239.

9 これについては以下の著作に依拠した。BLACK, J. A.: *op. cit.*; BOUCHER, F.: *Histoire du costume en Occident de l'antiquité à nos jours*, Paris 1965.; EVANS, J.: *op. cit.*; バスカル・セッセ, 前掲書。; ミシェル・ポーリュウ著, 中村祐三訳『服飾の歴史——古代・中世篇——』, 白水社, 1974年および同『服飾の歴史——近世・近代篇——』, 白水社, 1976年。; PIPONNIER, F.: *Costume et vie sociale, la cour d'Anjou XIV^e-XV^e siècle*, Paris 1970. なお, 具体的な内容としては, 拙稿, 「序説」, 80-81ページに簡単に整理したものがある。

10 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 10.

11 バスカル・セッセ, 前掲書, 149ページ。

12 CONTAMINE, Ph.: *op. cit.*, p. 203.; EVANS, J.: *op. cit.*, p. 28.; BOUCHER, F.: *op. cit.*, p. 191.

13 EVANS, J.: *op. cit.*, pp. 28-29.

14 千村典生『図解ファッションの歴史』, 鎌倉書房, 1969年, 23ページ。

ことを考慮に入れるならば、この変化は、これ以後の男女服における原理上の違いの一つの出発であったと思われる。これまでの服装の型は基本的には男女共通であったが、これは、共通というよりはむしろ男子服が型の変遷の中心であり、女子服はこれに従属的であったのである。この時期以後、男女服は独自の体系をもつことになったということであろう。¹⁵

こうした変化とあわせて、この時期、特に15世紀後半にかけて今一つの大きな変化が服装に現われてきた。それは、この時期すでにイタリアで見られつつあったルネサンスのいぶきの反映が服装にも現われてきていたのである。すなわち、従来と異なって、体の線を意識ないしは強調するという方向に服装の型の流行は動いていたのであり、これはまさにイタリア・ルネサンスのリアリズムおよび人間性主張の影響であったととらえられる。男子服において、体にびったり密着した胴衣、女子服において、深くあけられた衿ぐりや、ウエストを意識して増減の工夫がなされたスカートなどは、実にこうした体型を意識したルネサンス・スタイルの典型であった。¹⁶ここに、当時の服装は、総じて体型を否定するゴシック・スタイルからの脱却の方向にあったと言える。こうした型の変化は、衣服の素材として用いられた織物にも変化を生じ、ゴシック・スタイルでは量感を与える重々しい厚手のものが選ばれたのに対し、ルネサンス・スタイルでは従来以上に絹織物が用いられ、また毛織物にしても厚手ではなく軽いものが求められ、さらに編物にも体の線を生かせるような工夫がなされたのであった。¹⁷

ところで、このような服装の変化が見られたとしても、社会のすみずみまでそれが行きわたったというのではなく、時代風潮としてはこの傾向であったと言える。というのは、このような服装の移り変りは、この時期においては、まず王侯貴族を中心とする宮廷に起こったのであり、一般庶民においては富裕な

15 BLACK, J. A.: *op. cit.*, p. 124.

16 *Ibid.*, p. 124.

17 これは特に脚衣としての *chausse* (=hose) において著しいものであった。これについては、拙稿、「ファッションの変化と繊維工業」でその変遷を扱った。

市民がそれに加わる程度で、それとてもあくまでも副次的な形でしかなかったからである。15世紀後半中頃までフランス最大の諸侯として富強を誇り、豪華な宮廷生活を展開したブルゴーニュ侯¹⁸や、同様にかかなりの勢力を有したアンジュー侯¹⁹の宮廷などはまさにその舞台となったのである。もっとも、その宮廷にあっては服装は均一なものとして存在したのではなかった。なによりもそれは宮廷の主宰者たる王族、とりわけ王と王妃の服装とその他の者たちのそれとの差に現われた。それは量的にも質的にもそうであった。すなわち、多くの廷臣や召使たちの服は、型そのものは基本的には王侯のそれに沿うものであったが、かれらは宮廷内の地位と序列に応じたものを身につけていたのである。というよりはむしろ、序列に応じた衣服の着用が義務づけられていたのである。そしてこのことは当時の社会における衣服のあり方を端的に示すものと言える。王を頂点として王族の服装は量的にも質的にもきわめて奢侈的であったが、逆に言えば、奢侈的であることが必要とされた時期でもあった。もちろん、それを可能にする経済力なくしては、当然のことながらそれは不可能であった。たとえば、王ルネ (René: 1409-80) 統治下のこの時期のアンジュー宮廷における衣服購入にかかわる支出状況はそのことを示している。²³

さて、服装の移り変りが宮廷という社会の一部の上層部を中心に起こったとしても、このことは一般庶民階層における服装が意味をもたないということではない。それは、服装にかかわる主導権、すなわちファッションの主導権が宮廷にあったということであり、庶民の服装はそういった移り変りの中心から離れたところで、ないしはそういった移り変りから遅れた状態で存在していたということであろう。²⁴ 実際、この時期の一般庶民の服装は基本的にはこうした型

18 ホイジンガ著、堀越孝一訳、堀米庸三責任編集『中世の秋』、中央公論社、1967年。

19 拙稿、「序説」、77-79ページ。

20 拙稿、「序説」、81ページ。

21 拙稿、「序説」、81-82ページ。

22 拙稿、「序説」、79、82ページ。

23 拙稿、「序説」、84-85ページ。

24 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 79.

の変化に沿うものであったにしろ、富裕な上層市民や富裕農といった少数者のばあいを除いて、²⁵きわめて実用的なものにとどまっていた。大半の者にとっては衣服はまず第一に防寒のためにあり、いやおうなしに服装の移り変りとはほとんど無縁のところ²⁶にいたのである。しかも、機能性についてはほとんど関心がはらわれていないので、14世紀中頃以後の男子服の丈の短縮化の傾向にもかかわらず、一般庶民の服装は今なお総じて丈長でゆったりした型のものが続いていた。これはゴシック・スタイルの残滓であったと言えよう。²⁷このように、一般庶民の服装は時のファッションからかなり遅れて、緩慢な変化のリズムに従っていたのである。そしてかれらの日常着の素材が亜麻布やファスチアン織(futaine: 綿入り麻織物)や粗末な毛織物といった比較的低級な織物であったの²⁸も、王侯貴族や富裕な上層市民のそれが絹織物や上質の亜麻布や軽い毛織物であったのと対照的であった。²⁹庶民の大半にとって衣服は自給自足を基本としており、それを補う程度に少量の織物が購入されたにすぎず、一着の衣服は繕われて十二分に活用され、新しい衣服はまれにしか入手されなかった。³⁰なお庶民のなかでも富裕な市民の服装は、その経済力を背景に王侯貴族のそれに近づく傾向にあった。³¹実効は薄かったとはいえ、当時発布された奢侈取締令の服装に関する項目は、そういった傾向がかなりの程度であったことを物語るのではない³²かと思われる。富裕な市民はまた、それによって他の市民とみずからを区別

25 ROEHL, R.: Patterns and Structure of Demand 1000-1500, *The Fontana Economic History of Europe* 1—*The Middle Ages*, London & Glasgow 1972, p. 120.

26 CONTAMINE, Ph.: *op. cit.*, p. 206.

27 ミシエル・ボーリュウ、前掲書(古代・中世篇)、131ページ。なお、イタリアではあるが、当時のジェノヴァ市民についてもそれがうかがわれる。拙稿、「ファッションの変化と繊維工業」、103ページ。

28 CONTAMINE, Ph.: *op. cit.*, p. 206.; MANDROU, R.: *op. cit.*, p. 49.; BEZARD, Y.: *La vie rurale dans le sud de la région parisienne de 1450 à 1560*, Paris 1929, p. 226.

29 MANDROU, R.: *op. cit.*, p. 49.; CONTAMINE, Ph.: *op. cit.*, p. 199.

30 拙稿、「序説」、74ページ。; BRAUDEL, F.: *op. cit.*, pp. 236-237.

31 BRAUDEL, F.: *op. cit.*, p. 233.

32 HEERS, J.: La mode et les marchés des draps de laine: Gênes et la Montagne a la fin du Moyen Age, *Annales (E. S. C.)*, 26^e Année N° 5(1971), pp. 1100-1101. に、ジェノヴァのばあいのそれが出ているが、いずれのばあいもこれと類似していたと考えられる。

しようとしたのである。³³

次に、この時期のもう一つの特権階級を構成していた聖職者の服装について簡単にしておく。聖職者および修道士の服はあらゆる服装のうち最も変化の少なかったものであり、数世紀間に細部に若干の変更を受けたにすぎなかった。³⁴特に修道士の服はほとんど変化のないままで継続されていた。³⁵すなわち、修道会設立の時期に多少の時間差はあったにしても、各修道会の修道士の服の基本型には違いはほとんどなく、その時期に一般庶民に着用されていた丈長の型の最も簡素なものであった。³⁶修道士たちは修道会の会計係(chamberlain)から毎年衣服授与を受けたが、その素材は一般庶民のばあいと同様に決して高価なものではなかった。³⁷そのための安価な毛織物が地方の市場から購入されたりしたのである。³⁸修道女のばあいにも、その時期の世俗の女子服を最も簡素な形にしたものを身につけていたと考えられ、基本的姿勢としてはやはり質素を旨とするものであったと言えよう。³⁹けれどもすべての修道士が同一であったというのではなく、修道院にも階層秩序は厳然として存在していたので、上位者の祭服はこうした基本的姿勢を大きく逸脱するものとなった。教会関係の聖職者のばあいも修道士のばあいと余り違わなかったようである。すなわち、下級聖職者たちはおおもね修道士たちのばあいのように簡素な服を着ていた。しかしながら、⁴⁰⁴¹⁴²⁴³

33 CONTAMINE, Ph.: *op. cit.*, p. 199.

34 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 67.

35 *Ibid.*, p. 67.

36 *Ibid.*, p. 67.

37 *Ibid.*, pp. 67-68.

38 *Ibid.*, pp. 67, 69-70.; その色はおおもね灰色であった。ジョルジュ・デュビイ、ロベール・マンドルー著、前川貞二郎、鳴岩宗三訳『フランス文化史 1』、人文書院、1977年、195ページ。これは、ジョルジュ・デュビイの担当部分であるので、以下、ジョルジュ・デュビイの著作として表記する。

39 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 67.

40 *Ibid.*, p. 67.

41 *Ibid.*, p. 67.

42 *Ibid.*, p. 68. しかし、女子修道院の性格からすれば、それを逸脱するようなことも多かったらしい。主としてイギリスの女子修道院についてであるが、それをうかがわせてくれるものとして、POWER, E. (edited by M. M. POSTAN): *Medieval Women*, Cambridge 1975, pp. 89-99. がある。

43 ROEHL, R.: *op. cit.*, p. 126.

上級聖職者のばあいには、とりわけその祭服はきわめて豪華なものであった。実際、聖職者間の序列の格差は世俗界のそれと同じ位に激しく、また厳格なものであり、それが服装にも現われたと考えられる⁴⁴。フランスにおいては、中世の早い時期から、東方からの最もすばらしい絹はこうした衣服のために使用された⁴⁵とさえ言えるものであった。錦織にした紫色の絹や緋色の絹が用いられ、またしゅうが施されたりして壮麗なものであった⁴⁶。このように、聖職者ならびに修道士の服装は、基本的にはその時々⁴⁷の服装の移り変りとは無関係なまま⁴⁸で続いていたのであり、それは現代まで伝えられていると言っていい。そしてかれらの丈長の服への執着は、この時期の服装の移り変りをまえにしては一層その孤立性を高めることになったようにさえ思われる。

2 服装に作用した社会的要素

この時期の服装の型を中心に、当時の服装のあり方を王侯貴族、聖職者、都市および農村の一般庶民について概観したが、それらは決して同一ではなかった。そしてそれは服装の質の面で一層明らかであったと言える。ここにこの時期の服装のあり方の大きな意味が認められるのだが、当時の社会が今なお身分制の色濃い社会であっただけに、むしろ均質ではありえなかったと考えられる。そして実際、当時の服装はまさに身分秩序に応じた差をも具現していたのである。それは当時の遺物として残存する服から、その着用者の大体の年齢、身分、職種、さらには政治的役職さえも推論可能だと言われるほどのものであった⁴⁹。服装に現われたそうした差は、服装の型が大きな流れとしては基本的には画一的であっただけに、型以外の要素、すなわち服装に用いられた素材と色彩に最も⁵⁰顕著に現われたのであり、それが最も典型的に現われたのは宮廷における服

44 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 74.; ジョルジュ・デュビイ, 前掲書, 28ページ。

45 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 68.

46 *Ibid.*, pp. 70-77.

47 BRAUDEL, F.: *op. cit.*, p. 243.

48 千村典生, 前掲書, 17ページ。

49 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 79.

50 これは、織物生産においても、染色においても、当時は技術の進歩が緩慢で、それぞれの技術は

装であった。聖職者の服装においても序列差は厳格に設けられていたのだが、その型がきわめて長期にわたって固定され、ほぼ不変のまま継承されたということ、およびその服装の世俗社会への影響という点からすれば、いわば孤立した状態であったと言ってさしつかえないであろう。

さて、宮廷内の階層秩序は王および王妃を頂点として最下位の召使まで細部にわたっており、そこでは自己の地位と序列に応じたものを身につけるという形で服装が存在していた。⁵¹王および王妃を中心とする王族は高価な最高級の素材で作られた奢侈的な服を身にまとい、その素材の質とあいまって特権的な色彩をもっていた。⁵²この時期王侯に好まれた黒や、古代から特権的な色としての伝統をもつ緋色はそういったものであった。⁵³このことから、当時の宮廷の服装は個々人の社会的地位を示す機能を果たしていたということが理解できる。つまり、王侯の質・量ともに奢侈的な服装から召使の服装に至るまで、社会的に身分の表象手段、すなわちステータス・シンボルとして機能していたと言えるのである。⁵⁴ここに身分制社会における服装のもつ特異な役割を見ることができののだが、その意味では、王や王妃の服装が奢侈的で特権的であればあるほど、その身分秩序を維持していくうえで効果的であったとさえ思われる。そこから、この奢侈の誇示は身分秩序の顕示・維持のための、いわば社会的必然性をもっていたと考えられよう。そして、こうした身分差に応じた服装の差は宮廷内にとどまらず、原則的には宮廷外の一般庶民階層全体を包摂した形で存在していたことを考えあわせれば、その効果は全社会的なものとして作用したと言えよう。

相互に差をもちつつ一定の水準で固定していたので、その結果、織物と色に差が生じ、この差のあることがここで効果をもったと考えられる。

51 拙稿、「序説」, 79, 82ページ。

52 拙稿、「序説」, 83ページ。; EVANS, J.: *op. cit.*, p. 40.

53 これに関しては染色技術のもつ意味が非常に大きかったと思われる。山瀬善一「中世フランドルの毛織物と明礬」『国民経済雑誌』, 第94巻第1号(1956年), 48-54ページ。; 拙稿「Meyer Reinhold: *History of Purple as a Status Symbol in Antiquity* (書評)」『国民経済雑誌』, 第134巻第6号(1976年), 98-101ページ。; 拙稿、「序説」, 83ページ。

54 拙稿、「序説」, 81, 83ページ。

しかしながら、こうした身分差を具現した服装のあり方は、為政者の王侯貴族層の意図にもかかわらず、決して確固たるものではなかった、ないしはそうではなくなってきていた。すなわち、流動性が幾分大きくなってきていたのも当時であった。これは、この時期が一面では中世的価値観からの解放を標榜したルネサンスの時期であったことから、そうした時代の流れが身分制社会のあり方にも影響を及ぼしていたのであり、それがまた服装の面にも影を落していたのである。⁵⁵たとえば、中世を通じてなされていた仕着^{しきせ}(livrée) 賦与の慣習が徐々にすたれてきていることにも現われていると思われる。本来主君が家臣のなかで特に名誉・愛顧に価すると思う者に与えた衣服としての仕着は、賦与された者にとって非常に名誉なものであった。⁵⁶これは、その賦与によって王が家臣との一体感を示そうとしたもので、共同体ないしは家族の一員という意識が一層緊密なものになったと思われる。しかしながらこの時期になるとその賦与も減少の傾向にあり、またそのばあいにもその対象と機会は次第に限定されてきていた。⁵⁷これは、封建的人的結合の必要性がなくなり、王侯の権威が他の者から超越したと自他ともに認められはじめた現われと考えられる。そこには身分制衰退の動きが反映されているのではなからうか。さらにまた、先に触れた奢侈取締令のなかの服装に関する項目についても同様のことがうかがわれるのではないと思われる。そこでは服装と使用しうる織物について詳細に規定されていた。⁵⁸奢侈取締令発布の意図が政治的ならびに経済的なものであったにしろ、⁶⁰ここでは、為政者から見て分不相応とされる奢侈に対する取締りが目的であったのであり、そこには自分よりも下位の者に見られた服装上のいかなる行き過ぎにも為政者が神経過敏になっていたことが読みとれるのである。⁶¹このことは、

55 拙稿、「ファッションの変化と繊維工業」, 105ページ。

56 拙稿,「序説」, 82ページ。

57 パスカル・セッセ, 前掲書, 52ページ。

58 拙稿,「序説」, 82ページ。

59 ROEHL, R.: *op. cit.*, p. 122.

60 HEERS, J.: *op. cit.*, pp. 1100-1101.

61 ROEHL, R.: *op. cit.*, p. 122.

分相応でない、換言すれば旧来の身分制の枠を越えた奢侈が現実存在していたことを意味するものであろうと考えられる。富裕市民が自己の服装を王侯貴族のそれに近づけようとしたのは、これを端的に示すものであろう。そしてさらに、こうした奢侈取締令が実際には余り効果をもたなかった⁶²ということは、当時の社会に起こりつつあった変化を推測させる一つでもあろう。服装から見たかぎりにおいても、それがうかがわれるのである。

3 服装に作用した心理的要素

さて、今まで、この時期の服装のありようとそうした服装のもつ社会的意義を見てきたが、ここでは、そういった存在としての服装の着用者の心の動きを服装を媒介として考察したいと思う。というのも、服装のあり方、移り変りは非常に流動的な集団心理のきわめて繊細な領分にかかわるものだけに、この視角からの包括的な考察も一層必要なものと思われるのである。⁶³そしてこうした視角での考察に大きな示唆を与えてくれるのが、近年フランス史学界で一つの潮流を成しているいわゆる〈アナル学派〉による民族学的歴史学の提唱とその業績である。⁶⁴この民族学的歴史学の提唱においては、それが歴史における深層への下降という方向でとらえられるのであるが、このことは、歴史諸現象を表面的にとらえるだけでなく、その背後にあるもの、すなわち、生活の主体である人間に重点を置いてとらえるということに理解される。ここに〈mentalité: 精神状態; 心性〉が一つの新しい考察対象として重視されることになるのである。この〈mentalité〉は、言うなれば生活意識、さらには社会意識といったものとして考えられるが、これはきわめて曖昧なものと言わねばならない。けれども、そういった曖昧なものとして従来の歴史的分析からとり残されているものに光を当てるのがそこでは意図されているのである。⁶⁵そこにおい

62 CONTAMINE, Ph.: *op. cit.*, p. 205.; BRAUDEL, F.: *op. cit.*, p. 233.

63 HEERS, J.: *op. cit.*, p. 1094.

64 これに関しては、二宮宏之氏の訳によるジャック・ルゴフの講演内容が掲載された「歴史学と民族学の現在——歴史学はどこへ行くか——」『思想』, No. 630 (1976年), 1-17ページ、および、LE GOFF, J. et NORA, P. (dir.): *Faire de l'histoire*, Paris 1974. 所収の論文、LE GOFF, J.: *Les mentalités: une histoire ambiguë*, pp. 76-94. が大いに参考となろう。

てそういった生活意識が対象として意味をもつのは、集団のなかに現われた生活意識である。⁶⁶換言するならば、意識的なものであれ、無意識的なものであれ、ある時代の集団の——ひいては社会の——生活意識に及んでいき、それによって歴史の一つの再編成を試みることが求められていると言えよう。⁶⁷けれども、こうした生活意識、言い換えれば日常生活における人々の心のありようといったものは、＜思想＞のように洗練されたものでも、一つの体系だったものでもなく、むしろ＜思想＞よりも低次元にあるだけに、歴史の表面に現われにくく、またそういった意識の変化はきわめて緩慢なものであろう。⁶⁸ここでは、それを服装に現われたるものとして抽出し、当時の生活意識の一端へ接近してみたいと思う。

当時の服装には全社会的に身分と序列に応じた差があり、それは宮廷を中心とする支配者階層のなかにまず最初に、そして最も顕著に現われた。⁶⁹それはこの時期の服装がもつ大きな特徴であり、そしてまた、ここに当時の人々の心の根本的態度をも読みとることが可能だと思われる。すなわち、服装に用いられる素材と色彩には身分差に応じて差が明白な形で存在したのだが、ここには＜主君たること＞および＜臣下たること＞の意識が明確に出ていたのであり、人々はその差のあることを自明のこととして受けとめていたのである。換言・付言するならば、そういった差の存在を無意識のうちに意識し、各人が分相応であること、すなわち、主君は主君らしく、臣下は臣下らしくあることに当時としての、言うなれば平等観があったのであり、このような平等のなかに一定の安定と均衡が保たれていたのであった。その意味で、当時の社会としては、差異を明々白々にしておくことによって一定の安定が持続されたと考えられ、ここには当時の社会の身分意識が明瞭に反映していたと思われる。この時期の

65 LE GOFF, J.: *op. cit.*, p. 76.

66 *Ibid.*, pp. 77-78.

67 *Ibid.*, p. 80.

68 *Ibid.*, p. 82.

69 拙稿、「序説」、79ページ。

こうした身分意識は根底においてはそうしたものとして存在していたのだが、不動の確固としたものでは決してなかった。むしろ、前述したように、他者との違いの強調ということのなかには、たとえこの傾向がこの時期の服装における趣味であったとしても、⁷⁰そのこと自体を含めてこの時期の身分意識の揺らぎへの対応さえもうかがい知れるのである。そしてそれがまた、服装に対する王侯貴族の腐心、その結果としての服装における特異性の誇張に一層拍車をかけることになった。さらに、こうした脈絡からすれば、⁷¹長期にわたって固定的な聖職者および修道士の服装も、たとえ時代遅れ、流行遅れの観を呈していたとしても、それはそれでむしろ孤高の位置を一層印象づけることになったとも考えられる。いな、むしろ一般的な傾向に対する慎重な反動であったとさえとらえられる。⁷²王侯貴族は新奇性を求めることにおいて、聖職者は伝統に固執することにおいて、他の者と自己を区別しようとしたのである。その意味で、両者は既存の秩序の維持を志向するものであり、共通の利害に立ちうるものであった。さらにまた、前述の仕着下賜の限定化や奢侈取締令の発布は、支配者の側からすれば、そうした揺らぎのきざしのなかで支配者たることを過度に意識した一種の防衛本能的なものではなかったかと考えられる。そして支配される側からすれば、奢侈取締令の対象となりうるような、そういった分相応からの逸脱へと向かわせる心の動きがあったのではないかと思われる。自己の身分・序列よりも一段上の者の服を着たいという願望をもつようになったのであろう。⁷³さらに、後に述べる衣服にかかわる需要の変化、すなわち、一般庶民階層、特に市民の織物需要が表面化し、市場を形成しはじめてくるということは、庶民階層が自己の服装に積極的になってきていることを示すものであり、そこで多様な商品が現われだしたということは、庶民階層がファッションに敏感になりつつあったことを示すものと考えられる。⁷⁴従来のファッションの担い手が宮廷

70 拙稿、「序説」、81-82ページ。

71 拙稿、「序説」、82ページ。

72 BRAUDEL, F.: *op. cit.*, p. 243.

73 CONTAMINE, Ph.: *op. cit.*, p. 205.; BEZARD, Y.: *op. cit.*, p. 229.

という社会の上層部にあったということからすれば、たとえ当初はその模倣であったにしろ、模倣という行為そのもののなかに、一般庶民階層の側で分相応という意識に徐々に変化が生じてきていたということであろう。これらのことは、基本的には身分制社会であったとはいえ、当時の社会の変化に対応したものであり、そのなかで社会意識、生活意識が遂げつつあった変容の片鱗を示していると思われる。言うなれば、支配者階層には主として中世的な感覚での生活意識が強く、市民階層には近世的な感覚のそれが強く存在していたと言えよう。⁷⁵そして服装に対する庶民階層のこのような変化のなかにも、この時期を通じての個人意識の芽ばえを見てとることができるのではないかと思われる。

服装の型におけるルネサンス・スタイルの傾向についてはすでに触れたが、そこには、自分を赤裸々に見せたいというこの時期の人々の素朴な気持ちの反映をくみとることができるように思われる。服装においては、それが体の線の強調に現われたのであり、これにはルネサンスの造形美術におけるリアリズムの傾向が大きく影響していたと考えられる。このルネサンスの基本的な性格とも言えるリアリズムは、赤裸々な現実、そしてその現実においてそれなりに保たれている調和に人々の目を向けるものであった。⁷⁶男子服において、従来布地で作られていた脚衣<chausse>がこの頃から編物としてのそれにとって代わられるのは、そのほうが体にぴったり合うということのためであったし、女子服において衿ぐりを深くとり、肩や腰の部分に詰め物をしてまでウエストを細く見せようとしたのは、このリアリズムの影響を受けてのことであったと思われる。⁷⁷それはまた当時の色彩感覚にも現われている。すなわち、色彩のコントラストを強調することに美が求められ、たとえば黒と白と灰色というような配色

74 拙稿、「ファッションの変化と繊維工業」、104ページ。ここではジェノヴァのばあいを扱っているが、そこからの類推は許されるだろう。

75 このことはこれ以後の市民社会への動きを预示するものであろう。これに比して、農民のばあいは、今なお中世的な感覚での意識が強かったように考えられる。

76 こうした性格との関連で示唆を与えてくれるものとしては、伊東俊太郎「三.ルネサンスと科学」『岩波講座世界歴史11』、岩波書店、1970年、447-472ページ、がある。

77 拙稿、「ファッションの変化と繊維工業」、97-98ページ。；BLACK, J. A.: *op. cit.*, p. 124.

が好まれた。⁷⁸このようなコントラストへの好みは、当時の人々の内面的緊張に起因するものであったと言える。この時期の人々は、中世以来の教会によって与えられた道徳秩序の枠のなかに生きることを強いられ、そしてまたそれを自明のことと受けとめていた一方、それでは抑えきれない欲望や衝動を意識しはじめていたのである。さらにルネサンスの人間性主張の動きが高まるにつれて、それは一層明白な矛盾となっていたのであり、人々の心と行動は、慈悲と残忍、愛と憎しみ、地獄への恐怖と救済への願望、精神と肉体、理性と感情といった両極端の間を揺れ動いたのである。そしてこうした心の動きが配色におけるコントラストの強調へとおのずと反映されたのではないかととらえられる。⁷⁹なお、当時の色彩感覚に関しては、こうした現われ方の他に、色にシンボリックな意味を与え、そこに感情移入がなされた。⁸⁰たとえば緑は恋の色、青は誠実の色、灰色は悲しみの色、黄色は敵意の色といった具合に心の動きを与え、それを身につけることによってみずからの心の動きをも現わそうとした。この意味でも当時の服装は、いわばそれを着る人とともに日々の生活を生きていたと⁸¹考えられる。

ところで、この時期の服装における体の線の強調は、女性の服装に関して見たばあい、特に大きな意味をもっていたと思われる。すなわち、それは、中世キリスト教の肉体観・女性観からの漸進的な脱却の開始を意味していたととらえられる。というのも、キリスト教にあっては肉体的なものは嫌悪され、肉体の形態は服装のなかに包みこまれて抑制されるべきものであり、わけでも女性の肉体は悪魔視され、否定されたのである。⁸²それゆえにこの時期以前の服装はゆったりとした型をとったのである。しかしこの時期にはそれが徐々に変化しつつあったのであり、それにはまたルネサンスの人間性の主張やリアリズムの

78 拙稿、「序説」、83ページ。；ホイジンガ、前掲書、497ページ。

79 Z. バルブー著、真田孝昭、山本武利、永井邦明訳『歴史心理学』、法政大学出版局、1971年、94-100ページ。

80 ホイジンガ、前掲書、497-499ページ。；EVANS, J.: *op. cit.*, p. 42.

81 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 42.

82 POWER, E.: *op. cit.*, pp. 9-34.; バスカル・セッセ、前掲書、149ページ。

傾向が大きいかかわっていたと思われる。

今までこの時期の服装のあり方とそこに看取される服装に作用した社会的要因と心理的要因について見てきたが、次章では、服装がそれとして成立する基盤を、織物の消費、その仕立て、さらにファッションとのかかわりといった点から若干の考察をしたいと思う。

III 服装としての調達のあり方——経済的関連として——

1 織物に関する需要

たとえばこの時期のアンジュー宮廷に見られたような、王侯を中心とする華麗な服装においては、上質の毛織物や高価な絹や毛皮が存分に用いられていた。⁸³そうした奢侈的性格の強い商品は、各地の特産地から遠隔地商業を通じて購入されたのである。⁸⁴これらの商品は、遠隔の地から得られるという希少性と、特産物として個性的で洗練された芸術性を有するということによって奢侈品としての性格をもつに至ったのであり、こうした性格が王侯の服装にステータス・シンボルとしての効果を高めることにもなったと考えられる。この意味から、宮廷の衣生活は従来から市場生産に依存していたと言えよう。そしてそのばあい市場とは、各種の奢侈品を主要な商品としていた遠隔地商業の結節点となるような市場、すなわち、ヨーロッパの主要な交通要所に存在した国際的な市場としての歳市であったと言える。⁸⁵宮廷における織物需要と市場との関係はこうした質的側面から意味をもっただけでなく、当時の流通規模からすればまったく大型のものであったという量的側面からも重要であったと言わねばならない。⁸⁶もちろん、こうした市場とのかかわりは宮廷だけでなく、当時の社会において上流階層（もちろん宮廷・貴族はその筆頭であった）とされた富裕な農民、各種の役職者、上級聖職者、富裕な市民（経済的に成功を収めた商人およ

83 拙稿、「序説」、80-81、86-91ページ。

84 拙稿、「序説」、93ページ。

85 拙稿、「序説」、93ページ。； POUNDS, N. J. G.: *An Economic History of Medieval Europe*, London 1974, pp. 354-361.

86 拙稿、「序説」、78ページ。

び手工業者)のもとでもあったが、⁸⁷量的には宮廷のそれが圧倒的な位置を占めていたと思われる。いずれにしても、こうした全人口のうちのきわめて少数部分にこの種の市場での織物需要は集中され、またその水準が決定されていたと⁸⁸言える。

ところで、社会の大部分を占めていた農民と都市下層民から成る一般庶民のばあいには、14・15世紀以前にはこれに比して事情はまったく異なっていた。こうした人々の織物に関する需要は、その衣生活が元来自給自足的で、実用本位のものであったということから、まとまったものとしては市場に現われにくかったと言える。少なくとも、前述の国際的な市場には現われにくかったということであり、一般庶民の需要は地方的な市場としての週市とのかかわりのなかで必要に応じて充足されていたと考えられる。農民のばあい、必要な布は家で織られるか、そうでなければ最も廉価な亜麻布や未仕上げの毛織物が購入されたにすぎず、それゆえに農民の側からの市場での織物需要はきわめて小さなものであった。⁸⁹都市の下層民についても事情はほぼ同様であったと考えられる。⁹⁰両者の生活水準はほとんど同じようなものであった。もちろんこうした市場への依存度は都市住民のほうが農民よりも大きかったが、それは特に食物の調達においてであり、家計のほとんどすべてはこれに向けられたのである。一般に当時の庶民の衣食住への支出割合は、食物に80%、衣服に10%、住居その他に10%と⁹¹されている。その意味で、この時期までの一般庶民の織物需要は、国際的な市場はもちろんのこと、地方的な市場とのかかわりにおいても余り意味をもっていなかったと言えよう。むしろ、こうした地方的な市場との関連において意味をもっていたと思われるのは、修道院および教会関係の織物の需要ではないかと思われる。すでに述べたように、修道士(そしておそらく一般の聖職

87 ROEHL, R.: *op. cit.*, p. 121.

88 *Ibid.*, p. 121.

89 *Ibid.*, p. 118.

90 *Ibid.*, p. 123.

91 拙稿,「序説」,74ページ。; ROEHL, R.: *op. cit.*, pp. 117, 123.; MINCHINTON, W.: *op. cit.*, p. 115.

者も)が衣服の配給を受けており、その織物が地方の市場で購入されたということからすれば、ここでの需要はかなりまとまったものであったと推測されるからである。これに関しては、修道院であれ、教会であれ、それ自体として(時として広大な)⁹²所領経営を行なう集団であったことから、そのなかで織物および衣服への需要を位置づける必要があるだろうが、これは今後の個別的な研究課題として指摘するにとどめる。

当時の織物への需要はおおむね今まで述べてきたような状況であった。しかしながら、徐々にではあるが、ここに顕著な変化が生じてくるのもこの時期であった。すなわち、毛織物に関して一般庶民向けの低廉な中級品——いわゆる<New Draperies>——を対象とする市場がこの時期のヨーロッパ各地に存在してきていたのである。⁹³この新しい毛織物は総じて軽いものであり、その生産は、旧来の伝統ある毛織物生産地とは異なって農村や小都市で行なわれた。その意味で、この時期、特に15世紀には生産の新しい地図ができつつあったと言える。⁹⁴こうした中級の低廉な大衆品としての軽い毛織物の生産が盛んになり、奢侈の程を示していた従来の厚手の重々しい毛織物の市場が相対的に影を薄くしていった背景には、毛皮の使用の隆盛もさることながら、この時期のファッションの変化、すなわち、体の線を生かし、ぴったり体に合った型への移行もかかわっていたのではなかろうか。⁹⁵毛織物工業の盛衰を左右する重要な要因の一端をファッションは担っていたと言いうるのである。⁹⁶そしてさらに、そういった大衆品毛織物市場が誕生してきたということは、後に触れるファッションそのものの質とかかわらせても非常に大きな意味をもつことになるのである。

92 ジョルジュ・デュビイ、前掲書、29-30ページ。

93 拙稿、「序説」、87ページ。; POUNDS, N. J. G.: *op. cit.*, p. 309.

94 拙稿、「序説」、87ページ。; POUNDS, N. J. G.: *op. cit.*, p. 309.

95 拙稿、「序説」、87ページ。

96 THRUPP, S.: *Medieval Industry 1000-1500, The Fontana Economic History of Europe 1 — The Middle Ages*, London & Glasgow 1972, p. 259.

97 BOUCHER, F.: *op. cit.*, p. 203.; THRUPP, S.: *op. cit.*, p. 259.; HEERS, J.: *op. cit.*, p. 1096.

98 ジョルジュ・デュビイ、前掲書、216ページ。; HEERS, J.: *op. cit.*, pp. 1094, 1117.; POUNDS, N. J. G.: *op. cit.*, p. 399.

すなわち、こうした市場の存在は、まさに一般庶民の需要が表面に現われ、市場を形成するに至ったことを示すものであろうと考えられるからである。そしてこのことは、この時期に消費の型に変化が生じ、市場の構造の転換のきざしが生じていたことをうかがわせるのである。たとえばアンジュール宮廷における購入物のなかにさえこのような中級品の浸透が見られたのは、こうした時の流れの反映であったと言えよう。先に述べたが、そうした市場においては需要と好みに応じて商品の多様化が図られた。それは、一般庶民階層の側でファッションへ積極的な関心を寄せはじめたことを示唆するものではないだろうか。これに関しては別節で幾分補足して検討したいと思う。もちろん、このような大衆品市場の出現—需要の変化ということを考えるとき、忘れてはならないのは購買者としての一般庶民階層の購買力、ひいては所得水準の状況であらう。¹⁰¹そしてこれは、究極的には、当時の一般庶民の衣服状況のみならず、生活の全容をとらえるうえで必須のものであろうが、それを計測することは必ずしも容易ではない。それゆえ、さしあたり本稿ではそれを主として需要の変化の質的側面からうかがい知るにとどめておくことにする。

2 衣服製造の側面

前節では衣服の素材、特に織物の調達状況について見たが、ここではその仕立てに関して概要をとらえてみたいと思う。言うまでもなく、布地が裁断され、縫製されてはじめて衣服に仕立て上げられるのであり、その時々¹⁰²の服装の存立を規定する要因として、この側面もまた非常に重要な意味をもつと思われる。ここでは、仕立ての担い手と技術との関連で若干の言及を試みたいと思う。

すでに述べたように、この時期を通じて男女服の違いがいわば原理的に確立されたのだが、このことは仕立ての技術にも変化をもたらした。すなわち、この時から男性の服は男子服仕立師 (tailleur) のもとで、女性の服は女子服仕立師

99 POUNDS, N. J. G.: *op. cit.*, pp. 399-400.

100 拙稿, 「序説」, 87ページ。

101 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 52.; ROEHL, R.: *op. cit.*, p. 122.

102 パスカル・セッセ, 前掲書, 13ページ。

(couturier) のもとで作られ、この両者はそれぞれ別の系統の職種に発展するのである。¹⁰³ところで、こうした専門の職人たちの仕事は顧客生産の枠内で行なわれ、その主たる対象は宮廷を筆頭とする上流階層であったと考えられる。¹⁰⁴宮廷には王直属の仕立師、王妃直属の仕立師が王および王妃専属に存在し、¹⁰⁵宮廷の他の構成員のためには宮廷外の、従って宮廷所在都市の同種の職人に委ねられていた。¹⁰⁶ファッションの主導権が今なお基本的には宮廷にあったことからすれば、宮廷付きのものであれ、宮廷外のものであれ、こうした職人の技術水準は洗練され、高度のものであったと思われる。実際、ファッションの変化と仕立ての技術とはきわめて相互に関連をもっていた。¹⁰⁷14世紀中頃以後、体の線を生かし、体にぴったり合った型へと服装が移っていったとき、仕立ての技術はそれを可能にする水準にあったのであり、さらにまた大きな前進を遂げたのであった。¹⁰⁸これに対して、当時の一般庶民の大部分にとっては衣服は自家製であった。¹⁰⁹すなわち、織物が家で織られたものであれ、市場で購入されたものであれ、そうであった。そしてこのことは必然的に一般庶民の服装を素朴で単純なものに、また流行遅れのものにとどめることになったと考えられよう。

ところで、衣服の製造ということではないが、衣服そのものとしての調達に關しては、今一つ古着のもっていた意義を考える必要があると思われる。この時期を通じ古着屋がかなりの数で存在し、また古着市場さえ存在したのである。¹¹⁰古着がどのような人々のもとで生じ、その購買者層はどのような人々であったか、¹¹¹古着に対する当時の考え方はどのようなものであったか、古着とファッション

103 EVANS, J.: *op. cit.*, p. 26.; PIPONNIER, F.: *op. cit.*, pp. 138-139.

104 ベスカル・セッセ、前掲書、90ページ。

105 拙稿、「序説」、91ページ。なお、衣服の製造に関しては、関連ある他の職人、たとえば毛皮師、靴師、金銀細工師、ししゅう師といった職人の動きにも注意しなければならないであろう。

106 拙稿、「序説」、91-92ページ。

107 BLACK, J. A.: *op. cit.*, p. 119. これに関しては、裁縫用具、裁断技術、縫製技術といったものに留意する必要がある。

108 CONTAMINE, Ph.: *op. cit.*, pp. 203-204.

109 MINCHINTON, W.: *op. cit.*, p. 136.

110 CONTAMINE, Ph.: *op. cit.*, p. 206.; MINCHINTON, W.: *op. cit.*, pp. 131, 133. ここでは時代は幾分下るが、その存在について言及されている。

ヨンの移り変りとはどのような関連をもっていたか、など興味深い側面が残されているが、今は指摘するにとどめたい。

3 ファッションとの関連性

最後にこの時期のファッションそのものの性格について考えてみたい。すでに述べたように、たしかにこの時期のファッションの主導権は今なお宮廷を中心とする社会の上流階層の手中にあったと言えよう。しかしながら、他方において、一般庶民向けの毛織物市場が各地に生まれてきており、需要と好みに応じて商品の多様化が図られたことに示唆される、一般庶民の側でのファッションへの関与の積極的姿勢もこの時期のものであった。このことは、当時の一般庶民の服装が今なお基本的には伝統に従ったものであったとしても、そして服装の変遷の中心が今なお社会の上層部にあったとしても、そういった移り変りへの庶民の側での積極的な追従、換言すれば、従来王侯貴族の手にあったファッションの大衆化を示すものと思われる。そしてそれは庶民の側に生まれてきていた分不相応への志向を可能にするような意識の動きに強く作用されたと考えられ、これはまた、この時期の身分制社会の動揺という流れのなかで生じていたものであった。ファッションもまた、この時期の社会構造の変化に対応する形で質の転換を遂げつつあったと言えよう。

ファッションの移り変りは物質的發展が基礎的状況を成すものの、それだけでは説明しきれず、心の動き——たとえば、一方では自己を他者から区別したり、自己を旧世代の者から区別しようとする心の動き、他方では模倣への願望——¹¹⁴が大きくかわる領分である。服装に現われる心理の微妙な動きを総括的にとらえることは非常に困難ではあるが、服装を歴史的にとらえようとするば

111 CONTAMINE は古着屋の数の多さから奢侈の程を推論している。MINCHINTON は17世紀のそれについて買い手は労働者としている。

112 MINCHINTON はファッションの下方への伝播（多少の時間的ずれを伴いつつも）を述べている。MINCHINTON, W.: *op. cit.*, p. 133.

113 BRAUDEL, F.: *op. cit.*, p. 243.

114 バスカル・セツセ、前掲書、142ページ。; BRAUDEL, F.: *op. cit.*, p. 243. ; HEERS, J.: *op. cit.*, p. 1094.

あいには、このファッションの移り変りという、いわば節目が内包する意味を無視することはできない。ファッションの移り変りは、ときとして一時的な気まぐれの独走の結果のように写るにしても、それは所与の社会の総合的所産であり、その意味において究極的にはそれなりに一つの調和を追求しているもの¹¹⁵と考えられる。¹¹⁶それゆえに、この時期におけるファッションの動きも、こうした脈絡からすれば、それはこの時期以後の社会の動きへの一つの前兆とさえ見なせよう。すなわち、大衆性をもつということを近代ファッションの特徴ととらえるならば、¹¹⁷いわゆる近代ファッションはまさにこの時期にその源流を發したと考えられるのである。その意味において、ファッションそれ自身も、この時期を通じて、その歴史的な性格という観点からすれば過渡期にあったと言えよう。¹¹⁸

IV むすびにかえて

さて、14・15世紀フランスにおける服装に関して、その型の変遷、各社会階層にとっての服装の存在形態、そうした服装を媒介として現われた当時の社会のあり方および人々の心の動きを考察し、さらに、こうした服装が依拠した経済的状况を、織物需要の動向とその仕立ての側面からとらえ、あわせてファッションとの関連に言及した。服装を歴史的に考察することの意味は、冒頭にも述べたように、人々の現実の生活のなかで服装がもっていた意義を追求することであり、さらには、それを通じてその時代の社会および生活のあり方をより実態に即して再現し、再構成することであろう。その意味では、本稿で把握したことはいまだ決して十分な水準には達しておらず、むしろこの時期の基本的な状況を認識したにすぎない。多くの問題が残されていると考えられる。本稿で扱ったかぎりにおいて若干指摘するならば、次のようにも言えよう。たとえ

¹¹⁵ BRAUDEL, F.: *op. cit.*, p. 241.

¹¹⁶ ベスカル・セッセ、前掲書、144ページ。

¹¹⁷ 大塚尚人『近代ファッション論』、同文館、1975年、4-5ページ。

¹¹⁸ 拙稿、「ファッションの変化と繊維工業」、105ページ。

ば、服装の変化に関してはここでは概略だけを述べたにすぎないが、型そのものとしての変化とファッションの質の変化において、いわばその主導者と追隨者との関係をさらに詳細に考察する必要がある。また、服装そのものが、生活の必需品であるにもかかわらず、ないしはそうであるがゆえに、この時期を通じても全体としてはきわめて緩慢な流れのなかでその変化がとらえられるのだが、その緩慢な変化のなかに潜む歴史の脈動、今それを言い換えるならば、歴史的主体としての人々の生きざまの根底にあるような心の動きを、服装を媒介としてさらに可能なかぎり忠実・緻密に再現する試みが必要であろう。そのためには、遺産目録、会計簿・家計簿、結婚契約書、奢侈取締令、文学的作品といった報告的史料、絵画、彫刻、細密画、教会のステンド・グラス、貨幣、印璽、版画、タピスリーといったいわば遺物——これらは、服装を歴史的に研究する際に非常に重要と思われる——を従来とは違った角度で洗い直して検討するとともに、この時代の習俗などとの関連を踏えて見なければならぬであろう。それはまた、ひるがえって当時の人々にとっての服装の意味を一層明確に認識させてくれるのではないと思われる。さらに、こうしたことは、この時期以後次第に明瞭になる服装の国民性という側面を見ていくばあいにも、相關的に重要な示唆を与えてくれるであろう。これらはまさに試行錯誤を通じてと言うよりほかない。また、多様な性格を具現し、いわば当該社会の総合的所産である服装がそれとして成立する過程の諸問題、たとえば、本稿では割愛したが、素材——毛織物だけでなく各種の織物および毛皮、装飾的用途をもつ貴金属・宝石など——の生産ならびに交易を含めて当時の経済的諸状況との関連を考察しなければならないであろう。そこでの問題はそれとして純粋に経済史研究の側で重要なものであろうが、その成果を踏えたうえで、単にそれを援用するだけでなく、具体的な対象としての服装を媒介として相互の関連をとらえる必要がある。個々の問題には、さらに深め、展開すべき側面があり、また看過している観点も少なくないであろう。それらを今散発的に指摘することは、あるいは可能なものもあるかもしれない。しかしながら、生活と密着したとこ

ろでの服装の歴史的考察を志向するという立場からすれば、それはそれとして意識のなかに置きつつ、今後の課題としたい。

〈付記〉 本稿作成に際し、山瀬善一教授に懇切なる御指導を賜わった。記して謝意を表したい。